

## 第 64 回日本母性衛生学会総会・学術集会

テーマ 「母性衛生の夢と未来を語ろう」  
 大会長 大橋一友  
 大手前大学 国際看護学部 教授  
 開催年月日 2023 年（令和 5 年）10 月 13 日（金）・14 日（土）  
 会場 大阪国際会議場  
 参加人数 2,819 名

内訳

参加カテゴリ	早期登録	通常登録	合計
会員	1,010 名	208 名	1,218 名
非会員	603 名	391 名	994 名
学生	530 名	—	530 名
招待等	—	—	77 名
合計	2,143 名	599 名	2,819 名

学会内容

会長講演、理事長講演、特別講演（4 演題）、教育講演（7 演題）、  
 学会指定研修プログラム（2 演題）、シンポジウム（5 セッション・20 演題）、  
 ランチョンセミナー（8 セミナー・11 演題）、オンラインセミナー（10 セミナー・11 演題）  
 一般演題（359 演題 口演 212 演題（内、コメディカル愛育賞候補 10 演題）  
 ポスター 136 演題）、市民公開講座（2 講座）



## 第 64 回日本母性衛生学会総会・学術集会を振り返って

第 64 回日本母性衛生学会総会・学術集会長 大橋一友

### 1. はじめに

2023 年（令和 5 年）10 月 13 日と 14 日に大阪国際会議場において第 64 回日本母性衛生学会総会・学術集会を開催させていただきました。学術集会長の決定をいただきましたのが 2 年半前の新型コロナウイルス感染症の第 4 波の時期であり、感染の拡大が危惧された時期でした。ほとんどの学術集会がオンライン開催か中止になる中で、2 年先の学会がどのような学会になるかは、誰もわからない状況でした。2023 年（令和 5 年）5 月に新型コロナウイルス感染症が感染症法の二類から五類に変更され、やっと現地開催が間違えなく行えると確信でき、ほっといたしました。大阪での本学術集会の開催は 22 年ぶりでしたが、会員の皆さまをはじめ関係者の皆さまのご支援で、無事に学術集会を終えることができました。本当にありがとうございました。

### 2. 学術集会の準備

#### 1) プログラムの企画

学術集会長を拝命して、まず、学術集会のテーマを決めました。コロナ禍で閉塞感のある時期でしたので、明るく未来志向の学術集会にするべく「母性衛生の夢と未来を語ろう」をテーマとさせていただきました。

次に、開催形式と会場を決定しました。この時点では開催形式や参加者数の予測もできないため非常に迷いましたが、現地開催とオンライン配信を組み合わせたハイブリッド方式を行うことに決定しました。大阪国際会議場はメインホールの収容定員が 2,000 名を超える大きな会場であり、「現地開催ができなかったり、参加者が少なかったりしたらどうしよう」と不安の毎日でした。また、パンデミックが継続した場合には、特別講演・教育講演の演者の方々に来ていただくことが難しくなると考え、海外からの講師の招聘はあきらめ、関西を中心とした先生方にお声がけをすることにしました。また、オンライン配信では CLoCMiP の単位認定ができるセミナーをご用意しました。

#### 2) ユニークな試み

##### ① 大学全体でのおもてなし

私が勤務しています大手前大学国際看護学部は5年前にできたばかりの新しい学部です。以前に勤務しておりました大阪大学のように大きな大学には多数のスタッフがいましたが、新設の国際看護学部では経験のある人材は限られてきます。しかし、大手前大学にとってこの学術集会を開催することはとても名誉なことであり、大学全体で皆さまをお迎えしようと思いました。そこで、総合大学である強みを生かして、学術集会広報用のポスターや動画を本学の建築&芸術学部の学生に制作してもらい、学術集会を広報いたしました。手作り感のあふれる広報媒体が出来上がり、参加者の増加につながったと思っています。

また、学術集会当日には国際看護学部教員34名、大学院学生12名、学部学生120名以上が学術集会の運営に参加しました。さらに、建築&芸術学部の演劇ゼミの学生には会場運営やアナウンスを、現代社会学部の学生には12階の休憩コーナー横で会場周辺や阪神間の観光案内をしてもらい、大手前大学をあげておもてなしをすることを心掛けました。

## ② 子ども同伴可の学術集会

海外では子ども同伴の学会参加者はよく見られます。本学会は親と子どもの健康を推進する学会ですので、子ども同伴の学会参加は当然のことと考えました。そこで、託児所を準備して子どもさんをお預かりするのではなく、すべての参加者がすべての会場で、子ども同伴で参加できる準備を行いました。ただ、医療者は安全に子どものお世話をするスキルはありませんので、千里金蘭大学教育学部の保育を専門とする先生や学生さんをお願いし、キッズコーナーや授乳室を準備しました。

## ③ 日本母性衛生学会エビデンス・ベースド・プラクティショナー (JSMHEBP) 学会指定研修プログラム

2023年(令和5年)度から開始されましたJSMHEBP(Japan Society of Maternal Health Evidence-Based Practitioner)認定取得のための学会指定研修プログラム2演題を準備しました。本学会の新しい試みとして、次回の学術集会以降も継続する予定です。

## 3. 学術集会当日

天候にも恵まれ多くの方に来場していただきました。私は学術集会長として会場を走り回っておりましたので、各会場の詳細は会場係からの報告でしか知りませんが、参加者の皆さんが積極的に学術集会に参加していただき、学術集会を盛り上げていただいたと伺っています。また、会場を移動しているときに、子どもを同伴した参加者の方を目にしたり、子ども同伴での座長や演者という風景も見られたりと、とても温かい気持ちになりました。ま

た、キッズコーナーでも子供さんたちが楽しそうに遊んでいました。このような光景を見ることができたのも、参加者の皆さまのご理解の賜物だと感謝しております。

心配をしていました第一会場もたくさんの方の参加をいただき、私の会長講演をしているときに会場を見て、よかったなあと感じました。また、今回のシンポジウムは、一人のコーディネーターの先生に運営をすべてお任せし、活発な議論が展開されていたと伺っています。さらに、一般口演でも活発な議論がされていたり、ホワイエなどで旧交を温めておられる参加者の皆さんを目にしたたりして、改めて学術集会の現地開催の良さを感じました。

今回の学術集会では予算の都合で第1会場の録画しかできず、参加者の皆さまには十分なオンライン配信を行うことができませんでした。参加者の皆さまと演者の先生方にはお詫び申し上げます。

#### 4. 終わりに

最終的な参加者数は2,800名を超え、何とか赤字を出さずに済みました。一方で、諸物価高騰のおり、支出がどんどん増えてひやひやしました。さらにコロナ禍前にお世話になっていました企業の皆さまからの協賛は、コロナ禍後も厳しい状況が続いています。このような状況下で、今後の学術集会開催の在り方について考える必要があると思います。

まず、発表演題数の増加が喫緊の課題です。今回の公募の応募演題数は359題でしたが、コロナ禍前の第60回学術集会では460演題が発表されていました。今回ご発表いただいた演題はいずれも、新型コロナウイルス感染が蔓延する時期の研究や活動の成果の発表でしたので、この発表演題数の減少はやむを得ないと思います。このような社会状況の中で研究や実践をされていた学会員の皆さまに敬意を表すと同時に、今後はさらに研究や実践が活発になって、発表演題が増加することを期待します。

次に学術集会の開催方式です。会員の皆さまにはオンライン配信での参加は非常に便利だと思います。ただ、オンライン配信には多額の費用が掛かり、今回の学術集会でも同時配信をやめたり、配信用の録画も第1会場だけにしたりしました。これからの学術集会では、会員の皆さまの利便性と学術集会開催の経済性を考えていく必要があります。

最後に学術集会開催費の問題です。学術集会の収入は学術集会参加費と企業からの協賛や展示などの寄付です。これまでのように企業からの支援があればよいのですが、お話を聞いていますと、企業側も支援する学会を選択しているようです。これまでは各学術集会長の努力で企業支援をお願いしてきましたが、今後は学会全体として何か対策を行う必要があると思います。また、収入に見合った学会の規模を考える必要性を感じました。

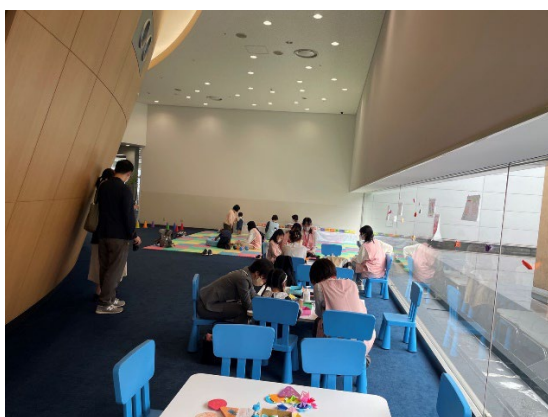
最後になりますが、正岡理事長をはじめとする本学会の会員の皆さま、本学会事務局の皆さま、学術集会を手伝ってくださった大手前大学関係者、大阪大学医学部産婦人科・保健学科の現役並びにOBの皆さま、大阪助産師会の皆さま、大阪産婦人科医会の皆さまに厚く御礼申し上げます。特に、プログラム委員をしてくれた私の元同僚や教え子の学会員の皆さんには、本当に感謝します。会長講演の際に最前列でうちわでの応援をありがとうございました（冷汗！）。



開会式



会長講演



キッズコーナー



閉会式後のスタッフ集合写真

第 64 回日本母性衛生学会総会・学術集会 概要

敬称略

理事長講演	演者	座長
母体感染を再考する。	正岡直樹	大橋一友
会長講演	演者	座長
海外の医療現場でふと思ったこと	大橋一友	金子政時
特別講演（4 演題）	演者	座長
1. 心筋再生医療の現状と展望	澤 芳樹	菅沼信彦
2. 新型コロナウイルス感染症 3 年を振り返って	忽那賢志	関博之
3. わかりあえないことから —コミュニケーション能力とは何か—	平田オリザ	渡邊浩子
4. セクシュアルリプロダクティブヘルス・ライツの原点としての母性衛生	木村 正	宮坂尚幸
教育講演（7 演題）	演者	座長
1. 「かわいい」の科学	入戸野宏	小川久貴子
2. サステナブルな産婦人科救急体制構築 —産婦人科診療互助援助システム（OGCS）を 中心に—	光田信明	西口富三
3. 母子手帳を通じた国際母子保健の夢と未来	中村安秀	北村邦夫
4. 看護職の働き方改革	高橋弘枝	遠藤俊子
5. 胎児心拍数モニタリングの歴史と未来	村田雄二	下屋浩一郎
6. 母乳育児の世論を含めた現状と今後の課題	河合 蘭	松崎政代
7. 男性が当たり前で育児ができる社会を —父親支援の今—	小崎恭弘	藤井ひろみ
シンポジウム（5 演題）	演者	
1. 高年妊産婦支援の未来（コーディネーター 富松拓治）		
① 後悔のないリプロダクティブライフプラン		足立朋子
② キャリアパスを考えた生殖医療		菊地 盤
③ 高年妊産婦の安心安全な妊娠期を支える医療		金川武司

- ④ 高年出産後の子育て支援—エビデンスを味方に— 前原邦江
2. 子宮頸がん撲滅の未来戦略（コーディネーター 上田 豊）
- ① 本邦における子宮頸がんの動向予測 榊原敦子
- ② HPV ワクチンによる子宮頸がん予防の現状と課題 八木麻未
- ③ AI の子宮頸がん診療への応用 宮木康成
- ④ 子宮頸がんに対する内視鏡手術の未来 小林栄仁
3. アジアの母性衛生の夢と未来 Prospective postpartum midwifery in Asia  
(Coordinator, Emiko Suzui)
- ① Breastfeeding Promotion and Support for Women with Preterm Birth: Maharaj  
Nakorn Chiang Mai Hospital. Venus Jansangsri
- ② Prospective postpartum midwifery in Taiwan: Enhancing Interdisciplinary  
Maternity Care in Hospital Settings Shu-  
Fang Wang
- ③ Postpartum care in South Korea: Now and the future. Jeongok Park
- ④ Midwifery practice required for the future of postpartum care in Japan.  
Akemi Mochizuki
4. 科学で育児を支える（コーディネーター 谷池雅子）
- ① 発達早期の社会的学習 鹿子木康弘
- ② マルトリートメントが与える脳への影響と親子を支えるペアレントトレーニング  
矢尾明子
- ③ 早産児の睡眠発達と育児支援 吉村優子
- ④ 幼児の眠りと子育てを支える双方向性アプリ“ねんねナビ”の社会実装から見えた  
現代の育児の困難感 吉崎亜里香
5. 出生前診断から胎児治療へ（コーディネーター 遠藤誠之）
- ① 出生前診断 ブラックボックスは何処まで明らかになってきたのか？ レオポルド法と AI 松岡 隆
- ② 胎児治療の現状と将来 左合治彦
- ③ 出生前診断で思いがけない診断を受けた妊婦・家族へのグリーフケア

管生聖子

④ 出生前診断に関する医療機関や行政以外における支援の構築及び必要性について

原田奈美

オンラインセミナー（10 演題）

	演者	座長
① 新生児のフィジカルアセスメント	田中太平	井關敦子
② 母体急変を見抜くコツ 産科エマージェンシー臨床推論	望月礼子	酒井ひろ子
③ 「妊娠・分娩と薬剤」「授乳と薬剤」について知っておきたいこと	濱田洋実	葉久真理
④ 妊娠と糖尿病	杉山 隆	山田加奈子
⑤ 検証：果たして私は教育をしたのか	阿部智子	嶋澤恭子
⑥ 災害時対応	中根直子	白石三恵
⑦ ヘルスリテラシーとその人らしい意思決定の支援	中山和弘	西村明子
⑧ 多様な性のあり方と法政策の課題	谷口洋幸	藤井ひろみ
⑨ 不妊・不育の悩みを持つ女性の支援	村上貴美子	上澤悦子
⑩ 女性・子どもへの暴力とその影響—性犯罪に対する大阪府警の取り組みを通して—	坂本千奈津 鈴井江三子	鈴井江三子

市民公開講座（2 講座）

	演者	座長
① ごきげんさんで生きていくために 一人権とリプロダクティブ・ライツ	谷口真由美	中塚幹也
② ママが笑顔で母乳育児をするために知ってもらいたいお話し	Paula Meier	加藤育子